

9月 13日 (日) 列王下 5章	「そのとき、わたしもリモンの神殿でひれ伏さねばなりません。わたしがリモンの神殿でひれ伏すとき、主がその事についてこの僕を赦してくださいますように」(18節)。アラムの軍司令官ナアマンは、周囲の助けによって、癒しを得、主を信じる者となった。ただ、主君に従う礼拝を避けられないことを主に願い、主はその信仰を認められたのだった。
14日 (月) 列王下 6章	「エリシャがまだ彼らと話しているうちに、使者が彼のところに下って来て言った。『この不幸は主によって引き起こされた。もはや主に何を期待できるのか』」(33節)。そもそも、自分たちが主の戒めから離れ、主に背いた結果くだされた災いを、「神が引き起こされた。」と言い、更に神を侮って罪を重ねた驕りを、昔の人々のこと！と批判することはできない。
15日 (火) 列王下 7章	「彼らは互いに言い合った。『わたしたちはこのようなことをしてはならない。この日は良い知らせの日だ。…さあ行って、王家の人々に知らせよう』」(9節)。重い皮膚病を患う四人は、飢饉の時、普段以上に疎まれて城門の外に追いやられていたことだろう。しかし、彼らは食料や金銀を自分たちで独占することなく、城門の中の人々に知らせることを選んだ。
16日 (水) 列王下 8章	「…エリシャは答えた。『わたしはあなたがイスラエルの人々に災いをもたらすことを知っているからです。あなたはその砦に火を放ち、若者を剣にかけて殺し、幼子を打ちつけ、妊婦を切り裂きます』」(12節)。預言者に課せられる大きな責任、過酷な使命を思い知らされる。わたしの言葉に忠実に従い続けよ！という主の声がわたしたちにも語られている。

17日 (木) 列王下 9章	「ヨラムはイエフを見ると、『イエフ、道中無事だったか』と尋ねたが、イエフは答えた。『あなたの母イゼベルの姦淫とまじないが盛んに行われているのに、何が無事か』」(22節)。 「無事」に過ごすとはどういうことか。「わたし」だけのことではないのだとイエフの言葉が示す。主から目を背けて過ごしている日々は、決して無事ではないのだと。
18日 (金) 列王下 10章	「このようにして、イエフはイスラエルからバアルを滅ぼし去った。ただ、イスラエルに罪を犯させたネバトの子ヤロブアムの罪からは離れず、ベテルとダンにある金の子牛を退けなかった」(28・29節)。エルサレム神殿から離れたイスラエルの王は主に従いながら金の小牛という目に見える拠り所を捨てられなかった。見えない主を信じる信仰に立ち続けたい。
19日 (土) 列王下 11章	「ヨヤダは、主と王と民の間に、主の民となる契約を結び、王と民の間でも契約を結んだ。…こうして、国の民は皆喜び祝った。アタルヤが王宮で剣にかけられて殺された後、町は平穏であった」(17・20節)。祭司ヨヤダは主の民となる契約によって、町に平穏を得させた。今、わたしたちは主イエス・キリストの執り成しと恵みによって、主の平安をいただく。
20日 (日) 列王下 12章	「ヨアシュは、祭司ヨヤダの教えを受けて、その生涯を通じて主の目にかなう正しいことを行った」(3節)。七歳で就位したヨアシュ王は祭司ヨヤダの教えに従って、主に従う信仰を学んだ。私たちは自分一人の力で信仰を貫くことはできない。一緒に聖書を学ぶ友、祈りを合わせる友、賛美を共にささげる信仰の友を必要としている。主の教会の交わりに感謝して。